

理工学研究科 化学・生命情報科学専攻 修士課程 <取得学位:修士(理学)>

(1) 教育研究上の目的

項目	人材の養成に関する目的その他の研究教育上の目的
教育研究上の目的	化学・生命情報科学専攻では、各自が有する基礎学力を、化学、生命科学、それらと関連した情報科学分野における最先端の研究活動の中で実効的に活かし、新たな理論の構築から社会の発展に貢献できる科学技術への展開に貢献すると共に、自身の学びの成果を科学的根拠に基づいた言葉で専門分野内外を問わず正しく伝えることができる説明能力を習得させることを教育研究上の目的とする。また、理学においては自然科学における知識と理論またその現象を深く理解し、その諸法則を応用展開できる能力を習得させることを目的とする。

(2) 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

項目	卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）
教育目標	慶應義塾大学の修了認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を前提として、多様性を重視しつつ、科学技術の専門性を活かして未知の領域に果敢に挑戦し、社会を先導できる人材を養成することを目的とする。さらに、化学、生命科学、それらと関連した情報科学分野における最先端の教育研究を通して、基盤となる科学的な専門知識を深化させると共に既存分野が融合した新しい学問領域を創出する能力を身につけ、さらに優れたコミュニケーション能力によって社会および世界を先導して研究成果を普及させることができる人材の養成を目標とする。加えて、理学においては自然科学における知識と理論またその現象を深く理解させつつ、教育課程において定める所定の要件を満たした学生に対し、修士(理学)の学位を授与する。
資質・能力目標	（１）：学生一人ひとりの固有の才能に基づき、人間社会へ貢献する強い意志を持って主体的に問題を見出すことができること。 （２）：課題を要素化して、学術と先端技術を駆使して取り組むことができること。 （３）：基礎から応用までのあらゆる科学技術分野において、世界最先端で独創的な研究成果を生み出すことができること。 上記３項目は、専攻で共通である。 （４）：各自が有する基礎学力を、化学、生命科学、それらと関連した情報科学分野における最先端の研究活動の中で実効的に活かすことができること。 （５）：新たな理論の構築から、社会の発展に貢献できる科学技術への展開に貢献できること。 （６）：自身の学びの成果を、科学的根拠に基づいた言葉で専門分野内外を問わず正しく伝えることができる説明できること。 （７）：自然科学における知識と理論、またその現象を深く理解しその諸法則を応用展開できること
評価内容	理工学研究科における人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的に則り、各専攻において所定の単位を修得し、かつ、修士論文又は特定の課題についての研究の成果について以下の項目について審査を行い、総合的に評価する。 1. 主体的に取り組んだ研究に基づくものであること。 2. 研究内容が具体的、客観的かつ論理的に説明されており、新規性を有する成果、あるいは新たな観点・知見・解釈が含まれていること。 3. 従来の研究を適切に引用していること。

（３）教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）

項目	教育課程編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）
教育課程の編成	授業科目は、総合科目、専門科目、研究科目で構成する。化学・生命情報科学専攻の学位授与方針で示した修了要件を達成するため、専攻それぞれの特色を活かして学修者本位の学びを進めることができるカリキュラムを設定する。研究能力の育成のため、研究課題の設定および解決に至る方法論と研究の実施、収束、論文作成等について教授する。学生は指導教員に指導を受けながら研究に従事し、修士論文又は特定の課題についての研究の成果をまとめる。この過程においては多くの教員から段階的に指導を受ける仕組みを設ける。さらに、専攻ごとの特色や研究主題の展望を掌握し、専門分野での確かな知識や方法論を習得できるカリキュラムとして、座学中心の科目にとどまらず、専門人材育成、国際人材育成、多様体験重視など、学修者自身が何をどのように学びたいか、ということを考えて選択できる科目群の設定を一つの重要な方針とする。これに加えて、専門科目とは別に、最先端の科学技術と人間社会のより良い相互関係を提案し実現できるようになるための社会のリーダーを養成することを目的とした科目や、国際・学際的な知見の範囲を広げるための科目を指定単位数以上取得することを求める。
教育課程の実施	化学、生命科学、それらと関連した情報科学分野における最先端の研究を通して、基盤となる専門知識を深化させ、既存分野が融合した新しい学問領域を創出する能力を身につけ、優れたコミュニケーション能力によって、社会および世界を先導できる人材の育成を目指す。基本的に、研究能力育成、専門性育成、国際経験、多様経験、基礎教養、分野交流科目群を設定し、カリキュラムに適した研究教育指導を行う。
学修成果の評価方法	本専攻の教育課程により修得すべき資質・能力目標に対する学修成果の評価は、各科目において定める成績評価基準に基づいて行う。具体的には、定期試験、レポート、授業中の小テストや発表など、シラバスに定める方法によって行う。また、アセスメントプランを念頭に置きつつ、学生による授業評価アンケート等を組織的に実施することで、学生の主体的かつ自律的な学修を促しつつ、授業改善に向けた取り組みを推進する。
資質・能力目標と教育内容との関係	各種授業科目や研究科目の指導を通じて次の資質・能力を養成する。 （１）：学生一人ひとりの固有の才能に基づき、人間社会へ貢献する強い意志を持って主体的に問題を見出すことができること（総合科目、専門科目）。 （２）：課題を要素化して、学術と先端技術を駆使して取り組むことができること（総合科目、研究科目）。 （３）：基礎から応用までのあらゆる科学技術分野において、世界最先端で独創的な研究成果を生み出すことができること（専門科目、研究科目）。 （４）：各自が有する基礎学力を、化学、生命科学、それらと関連した情報科学分野における最先端の研究活動の中で実効的に活かすことができること（専門科目）。 （５）：新たな理論の構築から、社会の発展に貢献できる科学技術への展開に貢献できること（総合科目、専門科目）。 （６）：自身の学びの成果を、科学的根拠に基づいた言葉で専門分野内外を問わず正しく伝えることができる説明できること（総合科目、専門科目）。 以上の資質・能力目標を達成するため、総合科目、専門科目、研究科目を系統的に編成する。 （７）：自然科学における知識と理論、またその現象を深く理解しその諸法則を応用展開できること（専門科目）。 主として専門科目によって、本資質・能力目標を達成する。

(4) 入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

項目	入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）
求める学生像	本専攻では、以下の資質や意欲・興味を持つ学生を受け入れる。 (1) 理工学研究科における人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的に強く共感し、科学技術の素養を高め、多様性を重視したコミュニケーション力を身に着け、自らの考えと行動により科学技術に立脚した未踏領域に挑戦できる能力を習得したい人材。 (2) 化学、生命科学、それらと関連した物理学や情報科学を基盤とした分野における高い基礎学力を持ち、基礎科学の発展、または基礎科学を礎とした最先端の科学技術への展開に強い意欲を持つ者。
選抜の基本方針	このような入学者を幅広く受け入れるため、(1) 6 月入試、(2) 8 月入試、により選抜を実施する。また、海外大学の出身者に対しては、上記の入試とは別に(3) 国際入試を実施する。これらの選抜により、様々な能力やバックグラウンドをもつ学生が互いに切磋琢磨し、創発効果を生み出せる教育研究環境を目指す。 (1) 6 月入試：書類審査と口述試問で選考する。 (2) 8 月入試：基礎・専門分野の学力を確認する記述試問ならびに口述試問を行い、総合的に審査する。 (3) 国際入試：年に複数回実施し、主として書類審査と口述試問で選考する。